



〈一冊の本〉

池上 彰 著『おとなの教養』
NHK出版新書、2014年
本体780円（税抜）



本研究所研究員
長友 敬一
（倫理学）

最近、学生に「ニュースなどで、『多数の国と地域が参加しました』と言うけれど、その時の『地域』って何？」と質問したところ、頭をひねっていました。また、経済学部の人か学生にマルクスについて尋ねたら「名前しか知りません」という回答を得ました。成績のよい学生でも、ダーウィンの『種の起源』を「たねのきげん」と読んだりしています。文部科学省から全国の国立大学へ「教員養成系、人文社会科学系学部の廃止や転換」が通達されている状況で、「教養教育」はどうなっていくのだろうと心配になってきている時でした。なんとか学生と教養を培うテキストを読んでみたいと思っていた矢先、最近テレビによく顔を出している池上彰氏の本書に出会ったわけです。ベストセラーにもなっているので、本屋の店頭で平積みになっているので、いやでも目に付いたのですが。最初はあまり期待せずに読み進んでいきました。

本書は、「私たちはどこから来て、どこへ行くのか？」をメインテーマに、「宗教」、「宇宙」、「人類の旅路」、「人間と病気」、「経済学」、「歴史」、「日本と日本人」の七つの分野のエッセンスを簡潔に解説しています。

聖徳太子が教科書からいなくなり、鎌倉幕府の成立は「いいくに作ろう」の「1192年」

ではなくなりました。キリスト教の神様とイスラム教の神様は同じ神様です。微妙な関係にある中華人民共和国や大韓民国の建国についても意外な事実が明らかにされます。私たちが常識と思っていたことを問い直すだけではなく、「歴史とは勝者が描いたものであると同時に、その時どきの政治の事情や都合によって、見直され書き換えられる」「私たちは、病をもたらすウイルスと共存することで進化を遂げてきた」など、根本的な考察にも鋭いものがあります。

著者はリベラルか保守かはわかりませんが、朝日新聞のコラムをめぐって、新聞社との信頼関係を問い直した事案は記憶に新しいことです。テレビ朝日でもフジテレビでも特番の司会をしており、なるべく中立的なスタンスを保とうとしているように見えます。具体的でわかりやすい点も評価できます。簡潔すぎる部分もありますが、議論を深めるための叩き台として有用に使えます。

先日、朝日新聞の特集で「長い人生を過ごしていくと、結局、人と人をつなぎ、また、自分の支えになってくれるものは、専門職業的な勉強ではなく、教養として学んだことだった」という内容の記述がありました。本書でも、ハーバード大やマサチューセッツ工科大などでは、学部の四年間は教養教育で、専門は大学院などで学ぶことが紹介されています。専門知識はすぐに古くなるので、むしろ、新しいものを吸収し、自ら作り出していける基本的な教養力を身に付けるためとのことです。すぐに役立つことを教えるのは専門学校で、大学は「すぐに役立たなくてもいいこと」を教えるという発想があるそうです。本書からはじめて、いろんな本に移ったり、ネットで検索してみたりして、教養を深めていくのもいいのではないかと思います。